The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語のような精神-W.セラーズの類比説に関する一考察-
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2000, 26, p. 229-250
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語のような精神
——W. セラーズの類比説に関する一考察——

菅　野　盾　樹

目　次

1．意味と心 —— 問題の発端
2．意味論的文は指向的である —— チザムの主張
3．チザムのメンタリズム
4．意味は関係ではない —— セラーズの意味論
5．類比説のあらまし
6．点引用符の記号機能

言語のような精神
——W. セラーズの類比説に関する一考察——

菅野　盾樹

1．意味と心——問題の発端

何気ない会話、たとえば

——この部屋はひどく暑いな

——窓を開けましょうか

といったやりとりが意味をもち、コミュニケーションとして成功するにはどのような制約が必要だろうか。言語が意味するための条件をとりまとめて「意味条件」と呼ぼう。このなかに、人間の心ないし心理状態にかかわる条件が含まれているのはまず明らかだ。なぜそうなのだろうか。この点について、たとえば以下のような論証が可能である。ここに掲げた、二行にわたるある種の図形ないしデザインは、意味をもつ以上、単なるデザインではない。それは「記号」という名のデザインである。もっと限定して言えば、それは「言語」なのである。かりにそれがオオムの音声を忠実に仮名に写し取ったものにすぎないなら、人は何というだろうか。これは日本語の会話ではない。オオムは言語を解さないからだ、たしかにこれらの音声は日本語の音にそっくりだが、音がそのまま言葉ではないのはいうまでもないことだ——誰しもきっとこう断定するだろう。言い換えれば、記号デザインは言語を解する人間の所産である場合にかぎって、はじめて「言語」の名に値するのである。ところで、言葉の理解とは、高度な精神的働きでなくて何だろう。物言わぬ動物や言葉を解さない精神障害者がよしんば何かしら「精神」の持ち主だとしても、それは話にもならないひどく劣った「精神」でしかないだろう。要するに、問題のデザインが意味の働きの実をあげるためには、それが健常な心の持ち主によって創り出されたものでなくてはならない。

意味条件には心に関する条件が混じっている。この事実を精確にはどう解釈するか。これが私たちがここで吟味したい問いにほかならない。さいわい私たちは、近年(と言っても、もう数十年前になるが) この問いをめぐり、二人の哲学者の間にはなはだ興味ある論争が交わされたことを知っている。そこで、これを恰好の手引きとしつつ、この必ずしも容易ではない問いの解明にあたることにしよう。

二人の争点はおおまかにこう捉えることができる。一方の論者チザム (R. Chisolm) は、意味条件の源に心という実在を発見したと信じた。言葉が意味するものは、最終的

には、心がそうするのだ。ところが他方の論者セラーズ（W. Sellars）に言わせるなら、言葉が意味するという事態こそ、およそ意味なる現象のアルファでありオメガである。心にそなわる意味作用は単にその比喩的形態ないしアナロジーにすぎない、というのである。

両者の言い分はおいおい詳しく調べるとして、ここであらかじめ明らかにしておきたい点がある。言葉と心の連関を理解したいと願う者にとって、私たちの問いが避けて通れぬ関門であるのは自明である。しかしこの問いはまた、形而上学のいわば最後の問い、あの心身問題と深部で結びついている。セラーズが当面する問いに永らく携わってきたのも、この深い結合を、できるかぎり満足すべき仕方で解きほぐそうとする企図にでるものであった。[1)]

ある人物（仮にその名を「田中」としよう）の心的状態について、「田中さんは、夕方から雨になると信じている」という描写は、ひとつには、田中さんの心理に関する報告である。一見して明らかなように、この種の文は「田中さんは……と信じている」という組み立てを備えている。信じるとはつねに何かを信じることだ。空所に挿入される文が、信じられた当のもの、すなわちある事態を代表する。こうして私たちは、ここに、しかじかの事態への差し向け（reference）を発見する。言い換えれば、信念（ひいては心理現象一般）には〈指向性〉(intentionality)が伴うのである。この文が真だとしよう。もし行動主義心理学に立脚する研究者が田中さんの信念について調べるとしたら、彼はどうするだろう。信念は（部屋の机が見えるという意味では)「見えない」から、彼は田中さんが外部に表出した知覚可能な行動なり反応なりを詳しく調べるだろう（ここには行動主義流に解された「言語行動」も含まれる)。たとえば、夕方外出する際、田中さんがスタンドの傘に手を伸ばすかどうか、これも彼の観察事項の一つである。調べの結果、心理学者は「被験者はかくかくのことを信じている」と結論するだろう。

この心理学者の分析には、果たしてあの指向性がきちんと取り込まれているのか。セラーズはこう訊ねて、心身問題の探究にとって指向性が鍵となる所以を説明している。もし心理学的分析に指向性の要素が吸収されているなら、指向性は〈行動〉(behavior)、〈性向〉(disposition) といった概念をはみ出した余剰ではないことになる。人間は「心」をふくめてまるごと行動主義心理学で捉えらえることになる。逆に、もし〈差し向け〉の働きが分析の中に吸収されてはいないとするなら、この種の心理学は、心理学を称するものの、心について決定的な要素を取りこぼしていることになる。それは単に心的なものに対応する身体的相関物しか捉えてはいないのだ。それゆえ、心の分析に挫折した行動主義に代えて、〈心〉を中心に据えた新たな心理学を構築すべきだ、という帰結が引き出される。

しかし、私たちが眼を見張るのは、この「あれか、これか」を前にしたセラーズの構えがいかにも特異な点である。彼は決してこの二者択一に身をゆだねようとはしない。彼は繰り返し行動主義が人間学としては誤りであることを明言している。にもかかわら

ず、残りの選択肢をも彼は遠ざける。なぜなら、その選択は行動主義のある種の正当性、具体的にいえば、心的な概念構成に対するその正しい意義を無視し、一つの誤謬からもう一つの誤謬へ、すなわち心的実体という幻想へ、振り子が揺り戻すように赴くにすぎないからだ。こうして、セラーズにとって、指向性とは行動主義の形をとる「唯物論」とデカルト流儀の心的実体をふりかざす「メンタリズム」の双方から解き放たれて、もう一度虚心に、心身問題を考え直すための問題、問題区分からするとまことに小規模だが、しかし波及するところはまことに広大な、問題中の問題なのである。[2)]

2．意味論的文は指向的である —— チザムの主張

言語には他の表現（絵画、ダンスなど）ではそれほどはっきりしない格別な能力がある。言葉は言葉についていともやすやすと言葉を振り向ける。周知のように、論理学者は、言語自体について語るもう一つの言語を「メタ言語」と呼んでいる。言語のもつこの種の特性や用法などを「意味論的」と総称しよう。チザムは、意味論的事象について重大な主張を唱えている。ある場合に彼はこの主張を、「意味論的特性は心のもつ指向性に基礎を有する」と言い表す。それはまた、場合により、「すべての意味論的言明はある心理的言明を含意する」とも、「記号の使用を記述するには必ず心理的なものへ言及せざるを得ない」とも言い表される。言い方がさまざまであるのに応じて論点の微妙な相違がもちこまれ、議論はいやでも紛糾せざるを得ない。チザムの真意を全体にわたってあらかじめ精確にする仕事はもちろん大切には違いないが、今ここでそれに着手するのは繁雑にすぎる。それより彼の主張の具体例を採り上げ、ただちに考察をおこなう方が得策だろう。他のタイプの主張に含まれた、この考察から漏れてしまう諸点については、必要に応じて補って行きたい。

かねてチザムは、ブレンターノ（F. Brentano）の主張（すなわち、すべての心理現象は指向性をもち、そしてこの特性はただ心理現象にだけそなわる、という主張）を承けて、いわば言語版ブレンターノ・テーゼの確立に努めてきた。彼によれば、物理現象を記述するには必要がないが、心理現象の記述には欠かせない特有の言語、すなわち「指向的言語」(intentional language) が存在する。彼の予想では、この主張は単なる言語領域への適用を越えて、心の存在論へ直接拡張できるはずのものであり、言語の指向性は、本来、意識の指向性を自らの基礎として要求するはずなのである。彼がこう主張する根拠にはいくつかあるが、繰り返し提出される根拠として、言葉は心を抜きにすれば単なる音声に解体してしまう、という指摘がある。（あのオオムの鳴き声のように、単なる音声が意味することができるだろうか、というわけである。）さて、言語の指向性を云々するのには、それを検出するための基準を定式化しなくてはならない。実際、チザムの努力はこうした基準を完備した形で取り揃えることへ傾けられた。どんな努力を払ったか、成果はどうだったのか、こうした点については別稿にゆずることにして、[3)] ここで

は彼が差し出した一束の基準のうちの一つを見ておく必要がある。というのも、言語の意味論的特性を言語的指向性として同定するのに、彼がこの基準を採用しているからである。

問題の基準は次のようなものだ。ある単文を考えよう。この文に実詞（つまり普通名詞や固有名詞、あるいは論理学でいう確定記述など）が遣われているにもかかわらず、この文およびこの文を否定した文のいずれもが、問題の実詞が外延をもつとも、反対に、もたないとも、そのような外延に関する含意をいささかも伴わない場合がある。こうした場合にこの文は「指向的」なのである。

一見して、人間の心に関係するとおぼしい文が、この基準でテストしたとき、指向性なる性状を呈することが分かる。たとえば、「母親は娘にふさわしい夫を捜している」という文はくだんの基準によって指向性をもつ。なぜならこの文は、名詞句「娘にふさわしい夫」の指す人物が実在するとも、しないとも、そうした含意を伴わないからだ(ただし、話し手は、そのような男性の存在を少なくとも「前提している」とはいえるけれども)。こうした文のもつ性状が述部動詞の「捜す」に源泉があるのは明らかであろう。ここから推定して、〈捜す〉という行為は単なる物理的出来事ではあり得ない。なぜなら、「実在しないかもしれないもの」といった否定性を伴う対象への〈差し向け〉を物質がもつとは考えにくいからである。この行為は「指向性」（ここではあくまでも「言語的な」それ）を帯びていることを理由に、心理学的事象であると判定される。人々は安直に、コンピュータが記憶されたファイルから必要なデータを「捜す」などという。しかしこの言い回しは比喩にすぎない。ここで実際に生じているのは律儀な機械的処理であって、「捜す」のはコンピュータを操作する人間の方なのである。

こうした道具立てを整えたチザムは、「言葉の意味や使用を記述するのに遣われる文」に観察の目を向けている。ここでも結論は紛れようもない。この種の「意味論的文」（semantic sentence）もまた指向性を伴うのである。[4] たとえば、「英語の giant は巨人を意味する単語だ」と語る英語教師は、巨人なるものが存在するとかしないとか、この英単語の外延にかかわる含みを彼の言葉に盛り込んではいない。だから単語に解説を施した後、彼はあらためて「ところで巨人などというものは空想の産物で、この世にいるわけはない」と補足するかもしれないし、反対に、「巨人はすでに絶滅したヒトの一種だった」と真面目に語るかもしれない。こうした補足が可能なのも、そもそも解説を実演する発言が実詞の外延に触れるところがなかったからだ。

意味論的文は指向性をもつ。チザムに言わせれば、この種の文は何か心理的なものへの言及を潜在的にともなっているのでなければ、指向性を発揮できない。つまり、意味論的文は偽装された心理的文にほかならない、というのである。

この見方には、行動主義者の側からの反論が予想される。英語教師が口にした文は、本来は次のような文の縮約だとみなせるかもしれないからである。たとえば「英語を国語とする人は、人間の形をした巨大な生物を giant という単語で呼ぶ」という文である。

問題の語 giant は、話し手が使用するかどうかにかかわらず、一定の音声ないしデザインであることには変わりがない。結局この文がいわんとしているのは、英語を話す人が特定の場合に（たとえば、絵本で巨人を見たときに）しかじかの音声を発するということなのだ。この文は単に特定の条件が生体に特定の反応を惹起することを語るにすぎないのであって、ここには何か心といった格別のものが介入する余地はない。もしそうだとすれば、意味論的文は、なるほどある意味で「指向的」かもしれないが、他の言い替えを許さぬ、純然たる心理的文とは受け取れないことになる。

意味論的文を行動主義的語彙からなる文へ解消してしまおうとする見地から出されたこの疑いに対して、チザムは、何かを指してある名で呼ぶためには、その何かを何かとして「理解する」ことが必要だ、と切り返す。絵本を愉しむ子どもが、描かれた巨人をそれとは別のもの、たとえば雲を突くような大木と受け取れば、決して giant という音声を発しはしないだろう。この意味で、命名には理解が先行する。というより、命名には理解という、行動主義的用語にはまるでなじまぬ要素が介在するのだ。

この点を考慮に入れつつ初めの意味論的文を書き直せば、おおよそ「英語を話す人は、何かを人間の形をした巨大な生き物と見なす（信じる、知る、などの）場合にかぎって、それを giant と呼ぶ」となるだろう。こうしてチザムは、言語使用を記述するには、話す主体の信念、知識、あるいは知覚など、要するに心理的なものへの言及を省くわけにはゆかぬ、という結論を繰り返すことになる。[5)]

3．チザムのメンタリズム

チザムの主張は以下のように要約できる。「意味する」、「指示する」などの動詞を含む文は、言語の事柄として指向的であり（「言語的指向性」）、ひいては心の働き（これを「心的指向性」と呼ぼう）に言語的指向性の源泉があるという意味で、そうした文は結局のところある心理的事象を表している、と。

彼はこの見地を前述の動詞だけではなく、他の多くの実演動詞（performatives）ないし言語使用にかかわる動詞にも押し広げている。「命令する（command）」、「述べる（state）」、「断言する（assert）」、「言い切る（affirm）」などはその若干の例である。たとえば「断言する」を取り上げよう。新聞の経済欄に年末に物価が必ず数パーセントあがるという記事が見出されたとする。新聞の文章は経済見通しに関してある種の「断言」をしていることになる。これは一見するような、非心理的文であろうか。[6)] 少し考えてみれば、そうではないことが分かるだろう。というのは、単なる活字の列が何かを断言するなどとは想像もできないから。ことの真相は、記事を書いた記者がこの文（これを S とする）を遣ってある命題（これを p とする）を伝達しようと意図した、という点にある。およそ文が、まして使用されない文が「断言」するはずもない。人が文を使用することによって、文はある命題を表現することを得、さらに文に一定の行為の値が附与されて、ここ

に〈断言〉という発話行為が実現するのだ。とすると、「Sがpを断言する」という表現は、実のところ、「ある人がpを表すSを使用して断言を行う」という表現に等しいと言わなくてはならない。しかし、このような意味である人を「断言を行うもの」として描写することは、チザムによれば、心理的なものを引き合いに出すことなのである。[7)]

しばらく文の発話行為としての権能には留意しないようにしよう。文はさまざまな行為の差にはかかわりなく、共通の命題内容を運ぶように思える。「太郎は平生酒を飲む」という平叙文と「太郎よ、平生酒を飲むように」という命令文は、それぞれの行為とは別に行為ならざる同一の命題を表現すると解することができるかもしれない。[8)] いま私たちは、チザムのいう広義における「意味論的文」に〈命題〉という要素を発見した。チザムはこう主張しているように思われる。すなわち、「断言する」を初めとする一連の動詞(これらは実演動詞の一部である)が登場する文は、使用されることによって、「命題の表現」という関係に入るのであって、ここに心的指向性の痕跡が認められる、と。

前節で、文や語について語るメタ言語的文が結局は心的指向性を表すという主張を見た。いまチザムは、発話行為にかかわる一群の文がやはり心的指向性を表すという主張を行っている。一見すると種類の異なる文を、彼は二つとも「意味論的文」として括っている。その理由はまさに、これらの文には〈命題〉といった心的な存在者へのかかわりがともなうという点なのである。[9)] 私たちはここにメンタリストとしてのチザムの真面目を認める。たしかに、文が何か抽象的存在者にかかわるという見地は、必ずしも心を実体視するという意味のメンタリズムとは直結してはいない（命題に関しては実念論を、言語の機能については、心などへ訴えない見地を採用する哲学者がいてもおかしくはないだろう)。しかし、チザムが紛れもない古典的メンタリストとして振る舞っている証左は、「心的エピソード」(mental episode) ないし「思考」(thought) なる存在者を彼が要請するという事実である。ここで「命題」が両義的である点に注意しなくてはならない。一方で、それは個人の体験する出来事としての思考をいう。他方、それら思考を統べる一般者としての思考をいう。思考は個別の出来事として時間と空間に制約されるが、同時にそれぞれがいわば普遍者の代理の資格をおびるのである。あたかも個々の語が時空の中で生じる出来事（型代語 token）でありながら、しかし時間・空間とは没交渉な、しかじかの語（型語 type）として聴き取られるように、思考は単なる出来事の域をはみだしている。それはパース流にいえば、ある内包的存在者の型代（token）にほかならない。

この区別に留意しながら、チザムの主張を要約する一つの図式をしつらえよう。

(a) Sはpをσする＝Sはtを表現するのに使用され、tはpを指向する。

ここでSは記号の形態（文や語句)、pは文ないし語句の略号、σは一連の「意味論的動詞」、最後にtは「思考」を表す。二つ目のpは事実や事態などと呼ばれるものを代表するから、この図式は概ね次のような解釈を受け取ることができる。発語に関する

明示的な文（これももちろん発語であり、いわゆる「意味論的文」にほかならない）は、文が表現する心的存在者の指向性に基づいて分析される、と。議論の簡単を期すために、今後はσの値を「意味する」だけにかぎろう。また、pを語ないし（論理学でいう）記述と見なすと、(a)の代わりにもっと簡単な図式、

(b) Sはpを意味する＝Sはtを表現し、tはpを指向する、

が得られるだろう。[10)]

図式の解釈に勝手な予断を持ち込んではならないが、ざっと眺めただけでもいくつかこの図式の特徴的な含みが浮かび上がってくる。まず、これは抽象的・心的存在者を容認する点で実念論（realism）に荷担しているとおぼしい。第二に、これは特筆すべき点だが、言語そのものから意味論的権能が剥奪されるという仕儀になる。つまり、心的指向性と並んで言語的指向性も世界の正式のメンバーであるという見地とは異なり、後者は前者によって「分析される」その結果、姿を消すというのである。ここから第三の論点が出てくる。言語は思考表現のために使役される道具である、という言語観（言語＝思考の衣裳説）にほかならない。

こうした「古典的」見地は容認しうるかどうかという問題意識をもちながら、今度はセラーズの説を提示する番である。二者の見地の立ち入った付き合わせと吟味は、その後に行う予定でいる。

4．意味は関係ではない —— セラーズの意味論

セラーズの見地はチザムのとは何から何まで正反対のように映る。古典論者チザムが「私は考える、ゆえに私は語る」と主張しているのだとすると、革新論者セラーズは、反対に「私は語る、ゆえに私は考える」と言いたがっているように見える。言語的指向性を心的な指向性へ還元するのがチザムの戦略だとすると、セラーズはここを逆転して、言語的な指向性の独自固有な性格を称揚する。指向性に関するセラーズの見解を誤りなく見届けるために、彼の問題攻略を二面にわたる作戦として理解したい。一つは、意味論的文そのものの分析をチザム流儀の心的指向性抜きで最後までやり遂げること。二つは、これとは逆に、心にかかわる語り方ないし「心的談話」(mental speech) を、心という実体の仮設なしに再構成すること。後段の作戦が、彼のよく知られた「ジョーンズ神話」である。

もちろんこの二つ戦法は密接に結びついている。セラーズ自身二つを別々のこととして語っているわけではない。それどころか、後で確認するように、第二の部面での勝敗は、実は初めの作戦が功を奏するかどうかにかかっている。この意味でも二つの作戦は一体のものなのだ。ではセラーズは意味論的文をどのように分析するのだろうか。まず明らかにすべきはこの問題である。

彼の分析は心的存在者とその特性（指向性）を引き合いに出すチザムのものよりはるかに単純である。たとえば、「英語の giant は巨人を意味する」は、セラーズによると、「英語の giant は・巨人・である」に帰着するという。分析の眼目は、見過ごしてしまいそうな、小さな黒い点 —— これはセラーズにより「点引用符」(dot quotes) と呼ばれる —— にある。この記号は、語や文などの形態を分類するラベルを作るための仕掛けなのだ。この分析が主張しているのは、giant という言語要素が、日本語であれば「巨人」と呼ばれる記号と同類であること、それはまたドイツ語なら Gigant、フランス語なら géant などと呼ばれる記号とも同類であって、それらと一括りにしていわば〈巨人〉印を捺すことができるということである。

点引用符による分析のポイントを会得するために、ある譬えが役立つだろう。豊富な商品を揃え展示している大型家具店に行ったとせよ。売場には変哲もない事務机があるかと思えば、マホガニー造りの高級な書斎机もある。子どもの学習机、部屋の片隅に置けるライティングデスク、パイプ脚の軽便な机、どっしりした民藝家具など、種類も素材もデザインも実に多種多様な机が多数陳列されている。その机の一つ一つに〈机〉の商標が貼ってある。というのも、問題の家具はどれもすべて机としての機能 (function) を果たすからである。この家具が〈机〉印をもつのは、それが別のやはり〈机〉印を貼ったあの家具と同じ役割 (role) をするからである。これと同じように、giant はいわば巨人語 (giant–terms) という集団の一員であり、同類の単語と同じ役割をこなすことができるのである。こうしてセラーズによれば、一般に

(c) S は σ を意味する ＝S は概念 σ を表現する
＝S は・σ・である

という分析が成り立つ。[11] さて一行目には「概念」および「表現」という問題をかもす用語が出ている。しかしセラーズは概念や命題と言った抽象的なものを存在者に数えることを拒むノミナリストだから、[12] これは分析の単に前半部を代表するにすぎない。彼の唯名論の成否はどうか。この問題にここで深入りする必要はないだろう。要は彼が、チザムが従ったような、概念から心への経路をひとたび断ってしまったということを (c) の分析の経過のうちに確認しておけば足りる。それゆえにまた、「表現」の意味も古典主義者の場合とはおのずと違ってくる。彼らにとり概念とは心なる実体がとるある種の様態、唯一の一般者（いわば大文字の概念）に規制された複数の心的事象ないし思考である。以前に掲げた図式 (b) をもう一度見よう。S が「表現する」t がそれである。したがって、「表現」とは記号と思考との事実上の関係（心の働きによる記号の産出）と思考と一般者との論理的関係との積と見なすことができる。いずれにせよ、それは立派な「関係」の一つなのである。[13]

しかし、セラーズのいう「表現」はおよそ何かと何かとの「関係」ではない。この点をはっきり確認するために、分析の二行目を見よう。「表現する」にあたるのは、そこ

では「である」というコプラ(繋辞)であり、これの働きは類別を行う述定（classificatory predication）である。しかしこの述定を「関係」と見なすのは難しい。いや、それはある要素が集合へ帰属する「関係」になぞらえうるのではないのか、と反問されるかもしれない。だが帰属「関係」とはいうものの、類別（classification）はふつう言われる「関係」ではない。たとえば、本が辞書の右にある、彼は彼女を愛する、アメリカは日本より大きい、といったどの「関係」にもそれは似ていない。この種のコプラが表すものを「関係」と称するのは、論理学でいう選言や連言を「関係」と称するのが、もっともらしいがしかし誤りであるのと同じである。(ちなみに、標準的な論理学では、「関係」とは二つ以上の変項をともなう命題関数のことをいう。）ここにセラーズの主要な論点がある。すなわち、彼は「意味は関係ではない」というのだ。[14] もちろんこれは改めて吟味すべき重大な論点である。

点引用符を用いた分析を牽引している概念の一つに記号の「役割」(role）ないし「機能」(function）がある。この概念をめぐる問題点をあらかじめ指摘しておこう。(c)のタイプの分析は、点引用符を遣って作られた記号類別のためのラベルをある言語の要素に貼付する、という仕草にほかならない。それは、ラベルを貼られた言語要素が決まった役割を、すなわち引用符に囲まれた記号デザインが分析者の言語で演じる役割と同じ役割を、それもまた演じることを表している。右に掲げた例についていうと、「giant は・巨人・である」は、英語の一要素が、日本語（これが分析を遂行する者の言語にほかならない)の一要素と、記号としての役割を共有することを「示している」(ただし、「語っている」のではない。この点は後述)。

第一に問題となるのは、「同じ役割」が厳密な同値関係をいうのかどうか、という点である。しかし、翻訳の困難さを引き合いに出すまでもなく、異なる言語間に厳密な意味での「同義語」があるとは思えない。したがって、「同じ役割」は「かなり高い程度において類似した役割」という意味に解するほかはないだろう。

第二に、いったいこの「役割」とは精確には何なのかが明確にされなくてはならない。セラーズは記号の「役割」を、当の記号が記号体系の中で記号相互間にたもつ関係（ここには当然、記号の指示する対象や話し手の行為が関与する）として理解するようである。[14] 換言すれば、それは記号のいわば構造特性である。ここには、記号の意味とは記号的差異にすぎないとしたソシュール言語学に共通する見地が示されていると同時に、構造が機能を規定するという意味での機能主義の哲学が認められる。

最後に残された問題として、こうした役割概念が、メンタリストの要請する道具立てを秘かに抱え込んではいないかどうか、この点を見極める必要を指摘しておきたい。もしセラーズ流の「役割」がメンタリズムの要素を内包していたなら、チザムとの論争全体が意義を失ってしまうのは明らかである。

セラーズによる意味論的文の分析の要点は以上につきる。古典論者チザムが言語の意味を心および心的指向性によって分析して見せたのに対して、たしかにそこには心や心

的指向性への明示的な言及は一つもない。もしこの分析が成功していれば、意味論的文にかぎり、心なる実体を引き合いに出す必要はないことになる。換言すれば、言語が意味するという事態をメンタリズムをよそに了解できることになる。

しかし実は事態はいっそう急進的である。というのは、セラーズは単に意味論的文の理解に心的指向性が不必要であるばかりか、そもそも心的指向性は無用だといいたいからである。チザムは言語的指向性を言語の中に訊ねて、いわば定性分析によりその所在を証拠立てようとした。もし言語的指向性が存在するなら、心的指向性もまた存在するのでなくてはならない、とチザムは断定する。なぜといえば、前者が後者に基礎を有するのは明瞭だからである（物音やインクのシミが、それ自体、何かを「意味する」だろうか)。ところで言語的指向性はたしかにある。だから、心的指向性も当然ながらその存在を容認しなくてはならない —— こうチザムはいう。

いま、セラーズはこの「自明性」をその反対物へ、歴然たる「予断」へと追いやった。だからこのかぎり彼には心的指向性を容認する筋合いなどありはしないのである。しかし、セラーズには心的指向性に関する独特な見解がある。すなわち、「思考と言語の類比説」である。彼はこの説によって心に関する古典的見解を超出しようと企てた。私たちは、話の順序としてまずこの「類比説」を見なくてはならない。それをすませた後で、いま一度新規にセラーズ説の検討を行う予定である。

5．類比説のあらまし

心は見ることができない。色、かたち、重さ、こうした属性を心は何一つもちあわせない。これは心の捉えがたさを物語っているが、しかし反面で、心探究の秘密がまさにこの捉えがたさに横たわる事実を歴然と示している。セラーズは心にかかわる語り方が一種の理論的言説（theoretical discourse）であると見なす。洋の東西を問わず、古代人は心を〈息吹き〉とも〈風〉とも見なした。さだめしそれは、心の働きのあの素早さ、こうしようと心に思えばすぐに手が欲しいものに伸びるその迅速さ、不断にざわめき立ち、一時も休むことのないその動きなどが、人々には驚きだったからだろう。心が風だとは、しかし、隠喩にすぎない。風は埃を舞わせることができるが、そんなことは心には無理な話だ（念力（psychokinesis）を信じる人がいるが、少なくとも筆者は実例を眼にしたことがない)。心を風と観じるのは、あたかも二十世紀の物理学者が不可視の原子を太陽系モデルとして知覚可能なものにしたように、観察できないものを可能なかぎり合理的に理解しようという企図に出たいわば窮余の策なのである。こうした策を人はふつう「理論」と呼ぶ。心の哲学にとって決定的なのは、心は所与ではないという確認事項である。

いや、私たちは自分の心を覗き込めるではないか、自分で自分の心の動きを意識しているではないか、という異議を唱える向きがあるかもしれない。たしかにその通りであ

る。私たちが外部の事物について知る仕方と、自分の心について知る仕方は、明瞭に異なっている。自分の心に関しては、多くの場合、推論や証拠の仲介なしに直接これを知ることができる。にもかかわらず、この直接的な認識可能性はどこまでも理論的存在者としての心に属している。[15] この可能性がどのような基礎に基づくかという点については後述することにして、いまは、心認識の直接性と心が理論的存在者であるという規定とは両立する、という論点を提出するだけにしておこう。

いまセラーズはメンタリストの当然視する実体としての心を廃棄した。とはいえこれは、私たちが心なき人間となった、というような途方もないことを言うのではない。あいかわらず人は思考し、想像し、意欲し、その他あらゆる心の働きをなし続けるだろう —— ただし、心について思考するという唯一の働きだけは除いて。問題は世界を摑む際に使用する概念枠なのだ。たとえば、血管や心臓をどんなに子細に観察しても、肉眼では〈循環〉という概念を把握できない。とはいえ、ハーヴェイ以前の人間の体内を血液が巡っていた事実には一点の疑いもない。こうしてすでに、セラーズの語った「ジョーンズ神話」を手短に反復する用意が整ったことになる。[16] 早速に、神話時代の人々が採用する概念枠を明示することからこの神話を語り始めよう。

神話時代の人々は彼らがしゃべる言語のゆえに「ライル人」と呼ばれる。哲学的行動主義者ライル (G. Ryle) がその著書『心の概念』で展開したような、心理的な言葉遣いを他の表現に置き換えた言語しか彼らが口にしないからである（大雑把に言うと、彼らの言葉はチザムのいう言語的な「指向性」をおびてはいないと見なしうる)。彼らは私たちだったら心やその他の働きについて語るような場合に、つねに行動 (behavior, これには「言語行動」も含まれる）や行動への性向 (disposition) を口にする。彼らの言語を「原始ライル語」と呼ぶなら、それはすなわち行動主義的言語にほかならない。私たちの言語と比較して、原始ライル語はなお二つの面で貧しい。第一に、それは前節で問題にした、意味にかかわる語り方をなし得ない。意味論的文は原始ライル語では表現できないのだ。第二に、理論的な語り方（たとえば、法則を表現する全称命題や、因果関係を表す文）ももっていない。しかし、他の語彙や論理語（選言、否定など）では私たちの言語と比べ遜色のない表現力を、それはもつのである。

私たちにとっての心理的なもの、とりわけ思考に相当する言い回しを、ライル人がどんな風に語っていたか、具体的に一瞥しよう。私たちにとっての〈しかじかと考えること (to think that *p*)〉は、彼らにとり第一に〈しかじかと語ること (to say '*p*')〉であり、第二にそれは〈しかじかと語る、短期かつ直前の傾性 (a short-term, proximate propensity to say '*p*')〉にほかならない。彼らにとり、〈思考〉とはまずもってそれが出来事であるかぎり、ある内容を声に出して (out loud) 語ることなのであり、派生的に、そのように語る傾性である。〈しかじかと考えること〉は原始時代においては、実際、〈しかじかと声にだして考えること (to think-out loud that *p*)〉以外ではない。[17]

もちろんこの「語る」は単なるオオムのおしゃべり、あるいは音声などではなく、言

語理解をともなう行動でなくてはならないし、またウソや戯れであってはならない。ライル人は単なる物音と言葉とを区別できるし、一般に、可知的行動（あるいは精神病理学者のいう「了解可能な」行動）と無意義な行動あるいは反射的行動（たとえば、くしゃみ）の違いもわきまえている。また近年とみに盛んになった発話行為論から見るとセラーズの見地の特異な側面なのだが、語ることは「行為」であるとはいえ、ただちに「社会的行為」、すなわち聞き手に向けられ、相互性のうちに運ばれる行為、私たちの用語でいえば、コミュニケーション表現（communicative representation）ではないというのである。あるいはオースティン（J. R. Austin）やサール（J. Searle）が分析した「発話行為」(speech act）ではない、といってもいい。たとえば、「約束します」という発話はここにいう語りの形態にそのまま重ならない。

こうした概念枠の中で暮らしていた彼らライル共同体へ、いま意味にかかわる語り方と理論的な語り方とが追加されたと想像せよ。こうして彼らは自分たちの発言や語句について表立って口にするようになる。原始ライル語は長足の進歩を遂げたといってよい（こうして得られた言語を「原始ライル語の拡張形」と呼ぶことにする）。注意すべきは、セラーズがここで設けた前提である。意味論的談話はメンタルな要素をともなわない。換言すれば、意味論的概念は心的行為の枠組みから独立である。この主張は前節で詳しく見た。

やがて神話の英雄、我らの主人公ジョーンズが登場する。彼は同朋の振る舞いを観察するうち、そこにいささか異例な傾性を発見して驚く。ふつうならその種の傾性は発語に取って代わられるのに、いま彼が眼の前にするのは、こうした代置を経ずに他の傾性や他の行動へ直接結びつく傾性である。たとえば、〈水を飲む、と声に出して考える傾性〉が〈水を飲むと、声に出して考える行動〉を経由せずに、別の傾性（〈水はどこにあるか、と声に出して考える傾性〉）や行動（水を飲むこと）へと直行するのだ。そこで彼はこの種の結合を「理論的に」説明するために、観察できない存在者を要請する。人々のあらわな行動や傾性の見えない背後に想定されたかぎりで、この存在者は「内的」である。また、原始ライル語の枠組みが個人の言語行動の断片に負わせていた役割を引き継ぐはずのものであるという点で、それは個人的歴史を点綴するエピソード、しかも言語に類比するエピソードである。それはいってみればホッブズ（T. Hobbes）のいう「内的談話」(inner speech）にほかならない。ジョーンズは、この不可視の存在者を、表立った発言や行動によって完結する一連のプロセスを惹起する原因であると見なす。さて理論の仕上げとして、ジョーンズはこの存在者にふさわしい名を与えるだろう。今後、当該の存在者は「思考」と呼ばれる、と彼は宣言する。[18)]

天才ジョーンズは思考ないし内的エピソードの「意味」にかかわる次元について、どのような理論を組み立てるだろうか。心が意味するとは、彼にとってどんな事態なのか。セラーズ流の意味論的文の分析をすでに知る者にとり、その点の想像は難くない。彼はまず「内的」ではない、字義通りの談話が意味することの分析をすませるだろう。その

子細を繰り返すにはおよぶまい。意味は関係ではない。これが彼の結論である。この成果でもって、今度は思考の分析にとりかかる番だ、と彼は考える。フランス語式の引用符で内的エピソードを表すと、たとえば、

《giant》は（英語の話し手の心の中で）巨人を意味する、

と言うことができる(細かいことをいえば、ここではメタ表象を日本語の表現でおこなっているが、これは単なる便法にすぎない)。これと先に掲げた意味論的文「giant は英語で巨人を意味する」との類比は明瞭である。したがって、記号の機能的分類の記述（ラベル）を作り出す点引用符を使用することが正当なら、この使用と類比的な、心的談話の断片の分類を記述するための引用符を用いていけない理由は何もない。それがダイヤ型引用符である。これを遣えば上記の表現の代わりに新たに次の表現が得られる。

《giant》は◇巨人◇である。

語とそれを囲む新たな引用符からできた記述は、個別的生起（a pariticular occurence）としての概念に貼付されたラベルないし「普通名詞」であって、分析者ジョーンズの手持ちの表現素材から作られたものだ。換言すれば、それは概念型代（concept–token）を類別するラベル、あるいは概念型（concept–type）の名＝表象にほかならない。[19]

同じやり方で他の心的意味の形態（重要なのはもちろん「命題」である）を分析することは、ジョーンズにとりそれほど難しいことではない。要するに、心にそなわる意味秩序を分析するためには、字義的な〈言語的意味作用〉の概念だけで十分である。非言語的な何か実体としての心の作用などはいっさい不要なのだ。

以上で私たちはセラーズの「言語と思考の類比説」――簡単には「類比説」という――のあらましを知ったことになる。

6．点引用符の記号機能

ここにきて明らかとなった点がある。類比説の命数は、意味論的文に関するセラーズ流の分析の成否次第だという点である。もし分析が成功裏になされていれば、類比そのものには今のところ尤もな点こそあれ、格別の不都合はないのだから、全体として理論の先行きは明るい。ところがもし分析が失敗であったなら、それは類比の根拠を掘り崩してしまうから、セラーズの心の理論は全体として潰えてしまう。指向性に関する一書を編んだマラス（A. Marras）は、古典論者チザムと革新を標榜するセラーズとの論争の核心を取り出してこう述べている。思考あるいは他の心的出来事の概念を所有する以前に、言語の意味にかかわるカテゴリーを所有することが可能か、と。そして彼はセラーズが成功裏に分析を運んでいるかどうかについては依然として議論の余地が残る、と付言している。[20] そこで今後しばらく私たちの考察を、意味論的文の分析が期待通りの成

果を本当に収めているかという点に集中したい。類比説そのものの問題点に立ち帰るためにも、これは必須の作業なのである。

まず、セラーズ流の点引用符を用いた意味論的文の「分析」が、実際のところ何を遂行しているのか、曖昧である。それはどのような意味で「分析」と呼ばれるのか。疑問はこれにとどまらない。果たしてこの種の分析が、セラーズが清算したはずの思考実体を不正なルートで彼自身の言説へと密輸入している恐れはないのか（この疑問は前にも指摘した）。類比説の評価に向けて道を誤らないためには、初めにいささか形式的な考察を入念に施しておく必要がある。次の設問を私たちの考察のスタートとしよう。点引用符は記号論の観点からして、どのような機能をになうのか。換言すれば、点引用符の記号機能とは何なのか。

セラーズによれば、「英語の giant は巨人を意味する」という意味論的文は「英語の giant は・巨人・である」へ分析されるという。元の文を理解するには、当然ながら、語「巨人」を理解する必要がある。この文は英単語に関する日本語の解説だからである。ところで、もし点引用符を遣って作られた述語が語「巨人」に対応する、Gigant, géant など各言語におけるその類義語の総称にすぎないなら、後の文が意味上で元の文と違うのは明らかである。というのは、日本語の単語「巨人」を解しえない者にも後の文は理解できるからである。[21] この仮定によると、後者は「英語の giant は日本語の「巨人」と同じ言語的役割を果たす」を含意する。この文は英語と日本語の二つの語が同一の機能をもつことを述べているにすぎず、問題の機能については何も触れてはいない。だが初めの意味論的文はそれ以上のことを意味している。それは、英語のある単語が日本語のある単語と働きが同じである点に加えて、それがまさしく〈巨人〉を意味することを言い表すのだ。

セラーズ自身この論点には気づいている。彼は意味論的文が単に二つの言語表現の間に機能的同一性があることを語る文ではない、と明言している。[22] 意味論的文はものの類似性を表す文に似ている。「太郎は次郎に似ている」という文を理解できる人間（彼は太郎に会ったことがないとする）は、次郎の風貌を見知った者にかぎられるだろう。次郎がどんなか、それを知った者だけが、この文によって太郎に関し知識を増やすことができる。その知識のない者は、単に二人の人物が似た容貌をしているという含意をこの文から引き出すにすぎない。彼にとってこの文は太郎を描写する役には立たないのである。以前の比喩をまた持ち出してもいいだろう。ある家具が別の家具と同類であることが分かったとしても、それが何の役に立つかは必ずしも分からない。商品知識に乏しくワードローブの何たるかを知らない新入りの店員は、家具に貼られたラベルを頼りに商品を陳列することは可能かもしれない。しかし、彼が「これこれはワードローブである」という先輩の発言を理解できないことは確かである。

それゆえ意味論的文の「分析」にともなう一つの前提は、点引用符に挟まれた表現を分析者（ないし、この分析を理解する者）がすでに知っているということである。これ

は点引用符が与えられた表現から単にその名を作り出す道具ではない、ということを意味する。それを用いて作られた表現全体（点引用）にとり、引用された表現の形態がどこまでも大切なのである。これは引用符に関する正統的な考え方から逸脱した見方である。引用の正統説によれば、語と語の引用とはまるで別物にすぎない。平家物語は中世に書かれた軍記物語である。「平家物語」は内容にふさわしい、簡にして要を得た書名である。正統説はこのいずれもが用法にかなった正しい文だと認める。しかし、平家物語は漢字で四文字である、という文は誤りである。なぜならそれは少なくとも数万語を費やした長大な物語だから。ところが、点引用符はあくまでも引用された表現の形を引きずっている。換言すれば、点引用の表現力には引用された表現が幾分なりとも寄与しているのだ。この点で、正統説の言い方を借用すれば、点引用においては表現の使用(use)とその言及（mention）の区別を截然となすのは不可能である。

セラーズが歩んでいる道程が正統的な意味論が敷設するものとは異なることを明確に知るべきだろう。セラーズの見解をめぐり哲学者たちが討議を行った折りに、彼がクワイン（Quine）の示唆をいれて次のように述べているのは注目に値する。点引用とは単純な要素を連結して直接ひけらかす働きをする。[23] 意味に関する語り方（あるいは意味論的文）は、言語要素と言語外の存在者との関係を表すわけではない。それはむしろ「言語の内部」で生じている出来事である。換言すれば、意味論的表現とは、言語そのものの自己限定であり自己参照という出来事なのである（だからといって、もちろん、非言語的なものと一切の関係が絶たれたと言うわけではないが）。言い換えれば、点引用は元の表現の「直接引用」(direct quote）を行うのである。一般に、表現Aが表現Bを直接引用するためには、Aには二つの条件が課せられる。第一の条件は、AがBを名づけること。第二の条件は、AがBを含むこと。点引用がどちらの条件も充足しているのは一目瞭然だろう。この点に関して、点引用をセラーズが「例証を行う分類語」(illustrating sortal）と呼んでいるのは示唆的である。und も and も・そして・だ、と述べることは、これらの横文字にいわば〈そして〉印を貼ることである。このラベルはある表現の機能を雛形と照合して分類するために遣われるのだから、肝心なのはそのデザインである。ラベルは言語素材に附与されるのであって、素材のほかにラベルが指示する何か抽象的で非言語的なもの(「連言性」もしくは「そして性」？）を捜しても無駄だろう。[24] ラベルによる記述は、記述されたもの（ラベルを貼られたもの）がある「特性」を有することを基礎とするのではない。話は逆なのである。それが貼られた品物のなかみが真正であるのを保証するのは、むしろラベルの形態である。

一つの譬えを考えてみたい。さまざまに異なる夥しい作品群からティントレットの真作を鑑定する仕事にたずさわる美術史家がいるとせよ。彼は本物のティントレット作の絵画を少なくとも一例知るはずである。そうでなければ誰も当人に鑑定など依頼しないだろう。ある作品は彼の見るところいくつか問題の画家の特徴を示している。しかし真作に関する知識に照らし、これを間違いなくティントレットの手になるものと決めるに

はいくらか疑いも残っている。彼はどうするだろう。残されたやり方は、真作を検討し直し、文献にあたり、史実をさぐり、新たな決め手を捜すことである。この決定につねに白黒をつけられるとは限らない。場合によっては決め手の欠如を埋め合わせることができないままに終わるかもしれない。そうした作品に対しては単に真作の蓋然性を云々するのが関の山なのである。いずれにせよ、ある作品がティントレットの作に間違いないと断定するために、特定作家の作品であるというポジティブな特性（ティントレット性！）を発見しようと努めるのは無駄だろう。ある絵が暗いとか、人物を描いているとか、こうした絵画の特性と、それがティントレット作であるという「特性」とは同じ水準にはない。後者はむしろ作品群の類別に役割を演じる「真作の表象」、作品の特性の特性という高次な「特性」、あるいはティントレットに特有な「スタイル」なのである。

意味論的文が言語表現の機能的分類を行うというセラーズの洞察は、意味論的文の機能と美術史家の鑑定の働きとを比較することでよりよい理解を得ることができるだろう。第一に、意味論的文を理解しうる者は、あの美術史家のように、問題の表現についてその働きを実例に即して弁えていなくてはならない。第二に、セラーズによる意味論的文の分析は、当の意味論的文について「語る」というよりは、それについて何事かを「示す」あるいは「示唆する」(imply) のである。[25] これも美術作品の鑑定と似ている。というのは、鑑定は当の作品についての「記述」や「語り」(saying) などではないからだ。鑑定とはいわば真作の知識を光源とする作品の照明にほかならない。それは真作の「本質」を炬火のように掲げて、ティントレットが制作したかどうかに対し無差別な作品群の暗がりの中から真の作品を照らし出すことなのである。

セラーズはたび重ねて「意味する」(mean) という述語が「記述的ではない」と述べている。これは彼の論敵チザムのどうしても承伏し得ない点だった。意味論的文が記述を行わないと語ることは、それが真理値をもたないと語ることに等しい。「und はそしてを意味する」は真であり「und はまたはを意味する」は偽ではないのか。いったいこれでも意味論的文は記述の働きをしないとでもいうのか。[26] チザムのこの疑いは、実は記号機能に関する不十分な見地から育まれたものだ。詳しくは他の文献にゆずるとして、かいつまんで要点だけを確認しておきたい。[27] 記号は一方で意味されるものを透過する媒質である。そのようにして記号は事物を代表する。たとえば、記号デザイン「林檎」にはどこといって林檎に似た性状は認められない。にもかかわらず、「林檎」は林檎を意味する。これは語の指示がソシュールのいう意味で「恣意的」であることを表している。他方、記号は不透明な肉体でも表現をおこなう。この林檎は酸っぱい、という発言がそれ自体酸っぱいはずはない。しかし、言い回し(エロキューション)によっては「酸っぱい」という形容詞がいくぶんかすでに酸っぱさを ── 字義的ではないにせよ、比喩的には ── 表出するという事実を否定できるだろうか。グッドマン (N. Goodman) が明瞭に述べたように、記号の能力には、記述 (description)、描写 (depiction) などのほかに、表出 (expression)、例示 (exemplification) などが数えられなくてはならない。記号機能

としてただ前者だけをあげつらう代表主義がチザムの眼差しを曇らせている。意味論的文が記述をおこなわないというセラーズの真意は、それがあらゆる意味で「意味しない」ということではない。このかぎり意味論的文は真理値を担う。しかし、その意味の働きが代表主義の慮外にある「示し」(showing) の次元に属すること、このことを彼は主張したいのである。

点引用の記号としての働きはこれでおおよそ明らかになった。これを元手になすべき仕事がある。点引用の意義を新たにいくつかの角度から照らし出すこと。この点をめぐっては、セラーズとチザムの間に交わされた書簡がとりわけ助けとなるだろう。というのは、それらには含みの多い見解の数々が豊かに見出されるからである。(以上、前編)

【注】

1) 本稿は、菅野盾樹(1986) 増補版として執筆された論文の前編である。後編は『年報人間科学』(第21号、2000) に掲載される。現在、筆者のホームページ (http : //plaza 27.mbn. or. jp/~homosignificans/) に掲出しているものと同じ内容であるが、活字メディアによるヴァージョンも必要ではないかと考えここに掲載することにした。なお類比説に関連して、菅野盾樹(1998) も参照していただきたい。またこの稿の続編ともいうべき内容の論文はすでに「他者認知としての言語へ」(『現象学年報』第15号、1999) として刊行ずみである。この論文も参照していただければ幸甚である。
2) Sellars (1958) 参照。
3) 菅野盾樹 (1983、第5章) で詳しく論じた。
4) Chisolm (1972, p.45f.)
5) *ibid*.
6) この点をめぐりチザムとその批判者との間でやり取りがあった。Sleigh (1967) および Chisolm (1967) を見よ。
7) Chisolm (1967, p.31 ; p.52) を参照。
8) この種の分析について、Searle (1969) を参照。
9) チザムは「命題」を心的実体の要素とみなすレアリストである。Chisolm (1983, p.50) を参照。
10) この図式は Sellars (1963, p.180) で言及された「古典派の考え」を代表する。チザムはこのコメントを受け入れている。Chisolm and Sellars (1958, p.52) を見よ。
11) Sellars (1968, pp.79f.), Sellars (1959/1967, p.311 *et passim*).
12) たとえば、Sellars (1963) を参照。
13) Bergman (1972) はこうした立場を代表する。
14) Sellars (1957/1967), Sellars (1963) を見よ。
15) セラーズの類比説が主題的に探究していない主題がある。すなわち〈類比〉ないし〈隠喩〉にほかならない。〈心〉概念が隠喩でしかないについては、菅野盾樹 (1998) を参照。隠喩理論の哲学的含意については、菅野盾樹 (1985) を見よ。
16) ここでは Loux (1977) による神話の「再話」を参考としている。
17) たとえば、Sellars (1969, v) を参照。
18) Harman (1987) は、(行動主義が否定する) 心的状態ないし心的表象があるということの意味を次

の二点で規定している。第一に、それが理論の中で説明の役割を果たしうること、第二に、それが因果連鎖の中に場所を占めていること。セラーズが類比によって構成した〈思考〉はどちらの条件も充たしている。

19) Sellars(1959/1967)を参照。ダイヤ形引用符については、Rosenthal and Sellars (1972, p.493f.)を見よ。

20) Marras (1973, p.18).

21) Church (1969) の「翻訳論法」を参照。

22) Chisolm and Sellars (1958, p.532).

23) Sellars (1974b, p.430).

24) Putnam et al. (1974, p.469).

25) クリプキがそうした解釈を与えている。Kripke, S., (1974, p.468).

26) Sellars (1969, p.431).

27) 記号観の革新については別の徳率の歴史的検証が必要となるだろう。レカナティ (1982) はこの点示唆的である。新たな記号観からする独自な業績として、Goodman (1976) を一例としてあげることができる。

【文献】

Aquila, R. E., 1977. *Intentionality*, University Park and London : The Pennsylvania State University Press.

Bergman, G., 1972, 'Intentionality' in Marras, A., 1972.

Centore, F. F., 1979. *Persons*, Westport : Greenwood Press.

Chisolm, R. M., 1967. 'Rejoinder' in Castañeda, H.-N.(ed.), *Intentionality, Minds and Perception*, Detroit : Wayne State University Press.

Chisolm, R. M., 1972. 'Sentences about Believing' in Marras, A., 1972.

Chisolm, R. M., 1983. 'Believing as an Intentional Concept' in Parret. H.(ed.), *On Believing*, New York : Walter de Gruyter.

Chisolm, R. M. and Sellars, W., 1958. 'The Chisolm-Sellars Correspondence in Intentionality' in Feigl, H. et al.(eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol.II. Minnesota : University of Minnesota Press.

Church, A., 1969. 'On Carnap's Analysis of Statements of Assertion and Belief' in Davis, J. W. et al. (eds.), *Philosophical Logic*, Dordrecht-Holland : D. Reidel.

Delaney, C. F., 1976. 'Basic Propositions, Empiricism and Science,' in Pitt, J. C.(ed.), *The Philosophy of Wilfrid Sellars : Queries and Extentions,* Boston : D. Reidel.

Goodman, N., 1976. *Languages of Art*, Indianapolis : Hackett.

Goodman, N., 1978. 'The Emperor's New Ideas' in Goodman, N., *Problems and Projects*, Indianapolis and New York : The Bobbes-Merrill.

Harman, G., 1987. 'Is There Mental Representation?' in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science,* Minnesota : University of Minnesota Press.

ジョンソン、M., 1986.『心のなかの身体』(菅野盾樹ほか訳)、紀伊國屋書店.

Kripke, S., 1974. 'General Discussion on Sellars' Paper,' *Synthese,* vol.27, no.3/4.

Lakoff, G. and Johnson, M., 1980. *Metaphors We Live By,* Chicago : Chicago University Press. [レイコフ、

ジョンソン『レトリックと人生』(渡部昇一ほか訳)、1986、大修館書店.]
レイコフ、G. 1993.『認知意味論』(池上嘉彦ほか訳)、紀伊國屋書店.
Loux, M. J., 1977. 'The Mind-Body Problem' in Delaney, C. F. et al.(eds.), *The Synoptic Vision*, Notre Dame: University of Notre Dame Press.
Marras, A.(ed.), 1972. *Intentionality, Mind and Language,* Urbana: University of Illinois Press.
Marras, A., 1972. 'Introduction to Intentionality, Mind and Language' in Marras, A.(ed.), 1972.
Marras, A., 1976. 'Rules, Meaning and Behavior: Reflections on Sellars' Philosophy of Language' in Pitt, J. C., (ed.), *The Philosophy of Wilfrid Sellars: Queries and Extensions*, Dordrecht: D. Reidel.
メルロ=ポンティ、M., 1967/1974.『知覚の現象学』(竹内芳郎ほか訳) 二巻、みすず書房.
Putnam, H. et al. 1974. 'Comment on Wilfrid Sellars,' *Synthese,* vol.27, no.34.
Putnam, H., 1981. *Reason, Truth and History,* Cambridge: Cambridge University Press.
レカナティ、F., 1982.『ことばの運命』(菅野盾樹訳)、新曜社.
Rosenthal, D. M., 1968. *Intentionality: A Study of the View of Chisolm and Sellars*, A Dissertation (microfilm-xerography).
Rosenthal, D. M. and Sellars, W., 1972. 'The Rosenthal-Sellars Correspondence on Intentionality' in Marras, A., 1972.
Sartre, J.-P., 1965. *La Transcendance de l'ego,* Paris: J. Vrin.
Searle, J., 1969. *Speech Act*, Cambridge: Cambridge University Press. [サール『言語行為』(坂本百太ほか訳)、1986、勁草書房.]
Sellars, W., 1958. 'Intentionality and the Mental' in Feigl, H. et al.(eds.), *Concept, Theories, and the Mind-Body Problem*, Minnesota Studies in the Philosophy of Science, vol.II., pp.507－709, Minnesota: University of Minnesota Press.
Sellars, W., 1959/1967. 'Notes on Intentionality' in Sellars, W., *Philosophical Perspective*, Springfield: Charles C. Thomas.
Sellars, W., 1963. 'Abstract Entities,' *The Review of Metaphysics*, XVI, 4.
Sellars, W., 1963. 'Empiricism and Philosophy of Mind' in Sellars, W., 1963.
Sellars, W., 1963. *Science, Perception and Reality*, London: Routledge & Kegan Paul.
Sellars, W., 1968. *Science and Metaphysics*, London: Routledge & Kegan Paul.
Sellars, W., 1969. 'Language as Thought and as Communication,' *Philosophy and Phenomenological Research,* XXIX, no.4.
Sellars, W., 1974. 'Meaning as Functional Classification,' *Synthese*, vol.27, no.3/4.
Sellars, W., 1974b. 'Reply,' *Synthese*, vol.27, no.3/4.
Sellars, W., 1979. *Naturalism and Ontology*, Reseda: Ridgeview.
Sleigh, R. C., 1967. 'Comments' in Castañeda, H.-N.(ed.), *Intentionality, Minds and Perception*, Detroit: Wayne State University Press.
菅野盾樹、1983.『我、ものに遭う』、新曜社.
菅野盾樹、1986.「指向性について ——「意味」の意味——」、『年報人間科学』、大阪大学人間科学部、pp. 123－151.
菅野盾樹、1985.『メタファーの記号論』、勁草書房.
菅野盾樹、1995.『いのちの遠近法』、新曜社.
菅野盾樹、1998.「〈自己〉という隠喩」、『大阪大学人間科学部紀要』、第24号、pp.25－44.
菅野盾樹、1999.「他者認知としての言語へ」、『現象学年報』第15号.

Mind as the Analogy of Language : Inquiries into W. Sellars' Philosophy of Mind

Sugeno TATEKI

Wilfrid Sellars, a extremely creative and synthetic thinker, is well known especially by his proposing a kind of functionalism in the philosophy of mind relatively early in this century.

The objective of this paper is to reconstruct his functionalism from a critical point of view and to elucidate the merits and problems contained in it.

The functionalism of mind which Sellars intends to construct is in the last analysis based on a functionalistic theory *of meaning*. He takes so-called 'mental state,' which he himself used to call 'thought,' as the analogue of speech which ought to be introduced as one type of theoretical entity into a theoretical discourse about human behaviors including speech in order to explain them theoretically.

It is clear that whether or not Sellars' analogy theory of mind is valid depends on finally the presumed validity of his functionalistic theory of meaning. The author concentrates on the problem of validity of Sellars' functionalistic theory of mind and comes to a conclusion that his theory has not any fatal defects.

Though the theory has a number of theoretical merits — to give just one example, demysitification of intentionality — the author insists, Sellars' notion of language should be totally renewed from a philosophical standpoint of human embodiment.